

始まりの現象

意図と方法

エドワード・W. サイド 著

山形和美／小林昌夫 訳



始まりの現象

意図と方法

エドワード・W. サイド

山形和美／小林昌夫 訳

《叢書・ユニベルシタス 358》

始まりの現象

1992年2月15日 初版第1刷発行

エドワード・W. サイド

山形和美／小林昌夫 訳

発行所 財団法人 法政大学出版局

〒102 東京都千代田区富士見2-17-1

電話03(3237)1731／振替東京6-95814

製版、印刷・平文社／鈴木製本所

© 1992 Hosei University Press

Printed in Japan

ISBN4-588-00358-5

モーニングサイド版への序文

『始まりの現象』の核となった試論は一九六七年から六八年にかけての冬の時期に書かれました。その核をとりまく部分は一九六八年と六九年に形を帯びてきて、一九七二年から七三年の冬までにはこの著作のほとんどが完成しました。『始まりの現象』の初版は一九七五年に出版されたのですが、それはさる高名な批評家が〈超自然的批評〉^{アンキヤニ}のジャンルと呼んだものを形成する一連の批評的著作のうちのひとつでした。この種の批評というのは、歴史的研究、つまり文献学的研究の伝統や常識的な手続きや、そして正直な気持ちになってつけ加えて言うべきだと思ふのですが、(実践に対比されるものとしての)文学に対する敬虔な態度などに基本的には立脚しない批評のことです。超自然的批評とは、J・ヒリス・ミラーが言うには、「言葉の論理から逃れようとする迷宮的な試み」であり、それは「無論理的、不条理的な領域」へとしばしば入り込み、「そこでは理知を相手にした抵抗がほとんど成功すると言つてよい」ほどのものです。ミラーはつぎのように述べて、こういった発想のすべてを要約してくれています――

「超自然的な批評家たちにとって」彼らの作業で論理が破綻する瞬間は、文学的言語の、あるいはそのようなものとしての言語の現実の本性の中に彼らが最も深く入り込んでいくあの瞬間である。こういった場合はまた、ソクラテス的な手続きが十分に推し進められた場合に究極的にわれわれを導いてくれるところでもある。超自然的批評家たちの作業の中核はいずれにしろこの体験を述べることにあって、それは瞬時にしろ、また全面的

にうまくいかないにしろ、この体験を合理化し、それをイメージや語りの形や、あるいは神話のなかで表現することである。

——「ステイヴンズの岩と治癒としての批評——II」
『ジョージア評論』一九七六年夏季号三三七—八ページ

比較的新しい批評の立場の出発点を——とくに修辭や言語の面に厳密な注意を払うことの重要性に正しい強調を置きながら——記述したものと、これは、思うに、ひとつの企図を明確にした重要なものがあります。そうは言っても、これは私が『始まりの現象』で試みようとしていたことを、少なくとも超自然的批評と、或る種の無益なあるいは無力な非合理性（こうした非合理性の存在は「深淵」とか「アポリア」とかいった用語で表わされるようになってきていますが）との間の連関性において、適切に特徴づけてくれるものではありません。というのも、「始まり」をひとつの研究題目として分離するときに、私の試みのすべてはまさに、ひとつの始まりを「合理的」かつ「権能を付与する」ものとして際立たせることにあったのであって、私は、論理面での失策とか、もう少し拡大して言えば、無歴史的な次元での不条理性などに対して主たる関心を抱くことなど毛頭なくて、逆に「歴史において」、出来事を初めから記述しようとして歴史的回想へと注がれる莫大な努力をこそ記述しようとしていたのです。

超自然的批評（これはまた新・新批評として知られています）の領分からのこのような分岐現象は時が経つにつれて大きくなってきています。だが、皮肉なことに、批評がより超自然的、無論理的、そして不条理的になればなるほど、それは、その形式主義、「世界」からの文学や「文学性」のその孤立、そしてその疑似宗教的キエティスムなどの点において旧・新批評とますます類似してくるようになってきたので

す。人目を引く形で、この類似現象は、イギリスのT・S・エリオットやI・A・リチャーズなどから発して、アメリカのブルックスやウォレン、テイトやランサム（ブラックマーはつねに脱中心的で変則的でした）などを貫いて、現代性とはなく伝統と手を結んだギルドの実践としての文学批評を確立した新批評家たちを弁護してきたことになります。新批評は、テキストに密着した読みに立って文化の統一性を確保する方途として対立項目を和解させながらも、アイロニーや〈詩自体〉を大切にしました。これはこれでまた、へわれわれの文学共和国の存立を確保する行為となりました。批評的精神を持つ読者が感じるものが〈不朽の知のモニュメント〉であり、それらが文明の中で占める位置が確保されるとすれば、それはそれらにまつわる霊気、正典としての重要性、崇拜の的となった中心性などのためであることが明らかになってくると、この共和国を保持するところの知的、政治的、かつ社会的な次元の強力な文脈の痕跡のすべては事実上一掃されることになりました。

テキストに付与されてきていたこの地位は再び戻ってはきましたが、それは『始まりの現象』の第5章で論じた道筋、つまり現代のフランス派の批評思想や、とくにその構造主義的、ポスト構造主義的、そして脱構築的契機を通してでした。この驚くべき事態の展開をまったく予見できなかったことについては、私には申し開きする余地はまったくありません。それでも構造主義に関して行なった私の議論においていくばくかの妥当性が今でもあるとすれば、それは、何十年も経った後で、また何千マイルも離れた所でいろいろの学問体系や体制などによってほとんど消し去られるか監禁されるかになるだろうとも思われそうな構造主義に備わったもともと根源的とも言える精神を私が強調した点であります。その『史的唯物論の轍で』でペリー・アンダーソンは最近構造主義を回想的に展望しましたが、そこで彼は構造主義がその後たどった馴化と変節の情況への種子は構造主義の初期の動きの中にすでに蒔かれていたと言っています。

だが私はそれでも、構造主義の運命の決定は、その後の歴史や相互に決定的に異なった種々の情況、主としてアメリカという国や学問の世界の情況の問題であつたと主張するものです。

したがって『始まりの現象』で提示された構造主義の分析がそれにもかかわらずその後の批評の傾向の一部となつてきているとすれば、『始まりの現象』の主要な批評的諸論点を、つまり時代の試練に耐え、さらに重要なことにその後の作業に対していくばくかの価値を持つてきたように著者には思える論点を簡単に改めて主張し確認することがこの序文の重要な役割であることには変わりないはずです。最初に〈起源〉(origin)に対立するものとしての〈始まり〉(beginning)という発想があります。前者は聖的、神話的、特権的であり、後者は俗的、人間が作り出すもの、不断に再検証されるものです。この発想もしくはこれに似た発想は、最近の批評的作業で関心を持たれてきている多くのことに優先権を付与するものになっています。例をあげるとすれば、『始まりの現象』にとつての中心的哲学者たるヴィーコへの関心の復活のみならず、統治に関する批評論、(女性や非白人や非ヨーロッパ人などの)抑圧の歴史の再検討、テキスト性に対する学際的関心、反・回想や公的記録の考え方、伝統の分析(あるいはエリック・ホップスボームの用語で言えば、作られた伝統の研究)、専門職業、学問、団体といったような近年の傾向などもあげられるでしょう。次に、語りとテキスト性の関連があります。これは、『始まりの現象』では、テキストとは何かということと、語りの虚構作品の形態と表現が発生と成熟と死という生命のプロセスに探りを入れていく欲求——小説家の意識によつて〈干渉される〉ものであると同時に認可されてもいる欲求——にいかにか基礎づけられているかということの二つの問題を歴史的な基盤に立つて研究する機会を産むことになったものです。この関連から、作者の存在、父権的所有、そして互いに対する力などを結合する権威という理論が発展してきましたし、さらにこれは結果として、知的実践の社会史へと、つまり言述の

操作や統禦から、真理や〈他者〉の表象へと広げることもできました。むろん、これより、ポスト産業主義的（つまりポストモダンの）社会におけるヘゲモニーは何に関わるものかという問題を予備的に、しかし具体的に理解する道が開けてきたのです。始まりの現象についての分析作業の中で私が手に入れようとしていたものによって或る程度意図されていたものとして、私はこれらのことすべてに言及しています。

『始まりの現象』を書いてるとき私は、その資料や論述の多くが、モダニズムからポストモダニズムとその後呼ばれてきたものへ推移に依存していることを十分に意識していませんでした。文化次元で私の抱く心的傾向は総じて、私のテキストでモダニズムの頂点に立つ偉大な傑作に大きな重点が置かれていることでも十分に証されているように、保守的な態度の気味を帯びています。とすれば、かなりの程度、『始まりの現象』が提示する中心点のひとつは、モダニズムというものが、〈血縁関係〉と呼びうるものの危機——線的な、生物学的基盤に立つプロセス、子供たちを親たちに結びつけるものの危機、モダニズムの中に養子縁組の反危機を作り出した、つまり新しい非家系的方法で世界を再集合しようとするような信条体系、哲学、ヴィジョンなどを作り出した危機——に対する回答であるところの美的かつイデオロギー的現象であつたということであります。イエイツの『ヴィジョン』やエリオットのアングリカニズムなどは、養子縁組の典型的な現代の例であります。イデオロギー的にも社会的にも、疑似父権的ではあるが養子縁組的に組織化された権威体制としてのシンジケート、政党、ギルド、〈国家〉などの勃興はこれと並行現象になっています。むろん、その結果や規模は美的な次元での養子縁組の場合よりはるかに広範囲にわたり、かつはるかに多様であります。確かに、これはオーウェルの『一九八四年』という作品の背負う重荷でもあります。たとえこの作品の極度の敗北主義やパシミズムを讀者が受け入れることがで

きないにしても、であります。ポストモダンイズムは養子縁組の問題を取り上げています。それはこの問題を扱う作業を行ないながら、今やデリダ、フーコー、アドルノ、その他彼らと同類の人たちの著作を読む読者にとって親しいものとなってきた業績を問題にしています。

こういったことはみな、最後にあげる論点、つまり『始まりの現象』に内意されているところの批評のヴィジョンもしくは批評の地位という論点ほど恐らく関心を引かないものであるかもしれません。この著作を書評した人のほとんどが、この著作の方法の示すひとつの徴候は、一方では純文学、他方では一種の哲学的省察という両者の間に不確定性もしくは躊躇らしきものがあることだと言ったことは、正しいことであります。この不確定性を表わすのにヒリス・ミラーが与えた用語が〈超自然的批評〉であることは、すでに見たとおりです。私の今の気持を言えば、『始まりの現象』の様式は、著作の構造と論述の筋道の両者において、いくつかのそれぞれ異なる事項を、当時は十分に緊急なことではあったという今回想的に見ればいずれも私にとって有意味のものである事項を表現する混成的言語であったということです。こういった事項の頂点に来るものとして考えられるものは、明らかに、〈文学〉というものは人間の活動の完全に分離したひとつのジャンルでありうるという考え方に対する不満でありましょう。この不満に関連しているものとして、文学、歴史、哲学、そして社会的言述、また歴史のなかでの男性と女性についての諸々の様式のエクリチュールのほとんどすべてのものなどは事実上互いに絡み合っているということ、それらがしばしば分離されるとすれば、それはなんらかの社会的目標を達成するために専門的な、いや認識論的ですからある根拠に立つてなされるということ、そして批評というものが批評としてあくまでも留まるべきものであり、傑作と言われる作品を誉めたたえるだけのものではなければ、今あげた事象の情況や絡み合う状況を、つまりレイモンド・ウィリアムズが最近『社会におけるエクリチュール』と題した著作で出

した結論を扱うものであるといった積極的な態度があるのです。だが、このような態度のどの部分もエク
リチュール自体の（孤立したものであろうとなかろうと）力を減じるものではなく、またそれは、適切な
場所に置かれた適切な言葉が達成できる素晴らしいことを批評が十分、かつ賛嘆の気持を込めて精査する
ことを妨げることなど決してないのです。しかし、批評のためになされるべきとくに緊急のことがあると
すれば（それをなすことが本書の主要な主張のひとつですが）、それは、権威を生ぜしめたり権威を促進
したりする力ではなく、自己意識に根をはり、自己の中に位置づけられた活動を、非強制的で共同体的な
目的を持つ活動を刺激する力を伴う始まりと始まりの反復の不断の再体験においてであります。これが少
なくとも、私が〈始まりの現象〉を自分のテーマとして選んだときに心に抱いていたことです。この企図
において成功したかどうかは、終わりの現象に対立するものとしての始まりの現象に対して読者が抱く共
感に大いに左右されるでしょう。

エドワード・W・サイード

ニューヨーク

一九八四年五月

序 文

ひとつの始まりとは何なのでしょいか。始めるためには私たちは何をなすべきなのでしょう。ひとつの活動、あるいはひとつの瞬間、あるいはひとつの場所としての始まりにはどんな特別なことがあるのでしょうか。私たちはいつでも好きなときに始めることができるのでしょうか。始めることにはどんな類の態度あるいは心構えが必要なのでしょう。歴史的に言つて、始めることにとつてもっとも好都合な特定の瞬間というものはあるのでしょうか。始めることがもっとも重要な活動であるような特定の人間というものがあるのでしょうか。文学作品にとつて、始まりはどれほど重要なことなのでしょう。始まりに関するこのような質問はそもそも出す価値があるのでしょうか。もしそうであれば、それらは具体的に、理解できるように、役に立つ形で扱うことが、あるいは答えることができるのでしょうか。

この著作にとつて、これらは始めるにあたつての問題であります。だが、これらがひとたび取り上げられれば、境界領域設定の手続きが始まります——これは有益なことです。なんとすれば、そうしなければ、これらの問題は論じるにはほとんどどうしようもないほどに複雑な問題のままであるからです。私は始まりの現象を行為としてと同時に思考の対象として主に考えました。この両者は平行する場合があるのですが、言語が用いられているときはつねに必然的に結びつきます。こう考えると、ひとつの始まりが記述されるか指摘されている場合には、〈始まり〉や〈出発〉、〈起源〉や〈獨創性〉、〈創始〉、〈開始〉、〈展開〉、〈權威〉、〈出発点〉、〈根源性〉などといった特定の語彙が用いられることになるのです。同様に、私たち

が実際に書き始めるとき、始まりの企図を特徴づけるところの一组の複雑な情況が認められてきます。したがって、言語では、始めることについて書いたり考えたりすることは、へひとつの始まりを書いたり考えたりすることと結びつきます。言語次元の始まりは結果として、創造的な行為であると同時に批評的な行為でもあることになります。それはちょうど、言語を規律のとれたやり方で用い始めるときに、批評的思考と創造的思考の間の正統的区別が崩壊し始めるのと同じです。

始めることは一種の行為であるだけではありません。それは、心的構え、一種の作業、ひとつの態度、ひとつの意識でもあるのです。むずかしいテキストを読み、それを理解するためにはどこで始めるべきなのか、また作者はその作品をどこで、また何故始めたのか、などを考えるときのように、それは実務的なことであります。また、始めること一般に特有のなにか独自の認識論的な特性もしくは作業といったものがあるのかどうかを尋ねるときのように、それは理論的なことでもあります。いかなる作家にとっても、書き始めることはひとつの計画された出発点と結びついた何ものかへ向かつて船出することを意味します。始まりはつねに、それがたとえ抑圧されているときですら、(稀な場合は別にして)何ものかがその後から続いて出てくる第一のステップです。したがって、始まりの現象は、かならずしもきわめて明確に理解されている役割でなくともひとつの役割を演じるものだということになります。確かに、それらは形態の次元で有用です——中と終わり、連続性、発展——これらはみな予め始まりの現象を内意しています。だが、複雑な形態を持つものにはそれ独自の論理があります。始まりの場合はどうなのでしょう。

思慮深い芸術家、思慮深い批評家、哲学者、政治家、歴史家、精神分析研究者などに対してもそここに始まりの存在を想定すれば、始まりの現象の研究は限らないケースのカタログにあまりにも安易になる可能性が出てくるでしょう。この著作での私の課題はまさに、(その可能性を意識しているときですら)

そのようなカタログを編むことを避け、そうする代わりに、始まりの現象の問題を読者の関心を引き、かなり細かく、実務的に、かつ論理的な方法で取り上げることになります。始めるときに、さまなければ始めることについて考え、そして書くときに、いかなる類の言語が用いられ、またいかなる類の思考がなされるのかを示そうと努めるだけではなくて、小説といったような形態の作品が、また「テキスト」といったような概念が、この世界でいかにして始まりの形態であり、存在の形態であるのかをも示したいと願うのです。さらに、ひとつの文化の時代から次の文化の時代にかけて起こるような変化の現象は、始まりの実体あるいは始まりのあるべき姿についての考え方における変種として研究できます。例えば、こんにち批評を実践するときに、批評を書き始めることをきわめて強く情況的に意識する態度が出てきます。ひとりの作家の作品を理解しようとするときにその作家の生涯が絶対的な優先的特権を持つというように考える傾向は以前よりは少なくなっています。これは何故でしょうか。また作家の作品を研究するときに何をもつて始めるべきなのでしょう。こんにちの批評意識が用いる特権的用語や、その意識の主要な局面は「実際に」何なのでしょう。

こういった問題を扱うと主張するいかなる著作も、議論の始め方によってのみならず、議論の連続性、主題の選択、用いる語彙などによっても障害を蒙る危険を冒すことになります。私のこの著作の場合のこうした障害の潜在性については、私自身誤算してはいません。私自身の批評用語（「自動的・他動的始まり」、「権威」、「意図」、「方法」、「始源」とは区別される「始まり」、「テキスト」、「構造」など）は、読めば少しは明らかになるように、かなり広範囲の関心を呼ぶ項目に集約する観念連合の上に立てられています。本書を構成する六つの章あるいはエピソードの各々は、始まりの現象のある面に依存する内的一貫性を持っています。各々は、始まりの現象という中核的主题からあまりに遠く離れていかない歴史的パタ

ーン（例えば小説の発展）をカバーしています。だが、第5章で、逆説的なことですが、ヨーロッパの小説の初期と後期の「両方の」面を論じることが可能であることを発見しました。全体としては、これらの六つのエピソードは、直線をたどっていないにしろ、始まりの現象の研究のための構造を形成しています。多分、エピソードにヴィーコを引用し、彼の著作を私の結語を形成するテーマとするという私の決意は私の（円環的な）論点を最高のものにしていきます。つまり、始まりというのは基本的には、単純な直線的成就であるよりはむしろ、回帰と反復とを究極的に内意している活動であるということ、始まりや始まりの反復は歴史的なものであり、他方始源は神的なものであるということ、ひとつの始まりは、意図を持っているがゆえに、それ自体の方法を創造すると同時に、それ自体の方法でもあるということなどです。つまり、始まりとは「差異を作る」ということですが、しかし（ここにこそこの種のテーマにおける大きな魅力があるのですが）その差異は、すでにわれわれに親しくなっているものと、言語で作られる人間の作品の秘める豊饒なる新奇さとの結合の結果としての差異なのです。本書の各章はこの新しいものと慣例的なものの間の相互作用の上に立っています。そして、これなくしては *ex nihilo nihil fit* 無からはいかなるものも創られない）ひとつの始まりの現象も現実に取りえないのです。本書のような試論を支える関心事は、その孕む真実のテーマです。つまり、へいかなる始まりにもかかわらず「始まりへから」の言語と歴史の共同体制、ということです。始まりの「時点で」このようなことを言うのは、歴史を欠いた言語の、また言語を欠いた歴史の保守的安全性をできれば今後避けたいがためであります。かくして、始まりの現象は根源的な厳しさを挫くよりは、それを確認し、また少なくともなんらかの革新が行なわれたことの、つまり事が「すでに始まったこと」の証拠を真なるものとして証明することになるのです。

はしがき

本書作成の作業中私は、ジョン・サイモン・グッゲンハイム記念財団の寛大な配慮をいただき、大いに益するところがあつた。その他の主として知的な面では、私はコロンビア大学の英文学・比較文学科の同僚や学生諸君に多大の恩義をこうむることになった。大学のハミルトン・ホールの四階では知性と友情の格別の零囲気がいつも満ち溢れていたが、その零囲気をここで正確に記述することはむずかしいことであるし、またその点ではそれに十分に感謝することもなかなかできない。そこに見られた思想の共感的受容、学問や思索に高い地位をすすんで付与しようとする姿勢、知的議論を真剣かつウィットをもって行ふ態度、こういった面ではコロンビア大学の作り上げた零囲気は他の追隨を許さないものがあると、私はかねがね思ってきた。コロンビア大学の他の部門の友人や同僚たちも同じように親切であつたし、また同じように貴重なものを与えてくれた。この点で、サデック・エル・アズム、モンロー・エンゲル、アンガス・フレッチャー、リチャード・マックセーナといった方々の名前をここであげることは、格別の喜びとなる。原稿の準備段階で手助けしてくれたルイーザ・イエリン、リディア・ディットラー、マッシモ・パチガルポの方々に感謝したい。また、ベイシック・ブックス社のジャメリア・サイエードは原稿を編集し、本の形にする作業を労苦をいとわずなしとげてくれた。タイプの仕事をするでしてくれたジョーン・ラモス、モーナ・イスカンダー、メアリサン・サイードの方々は、私が受けるに値しない恩恵をほどこしてくれた。とくに、私の妻の愛情にみちた理解が、このきわめて長い始まりの作業を通して私を支えてくれることになった。

引用文の翻訳についての覚え書

あらゆる場合に、原文が英語でない作品からの引用は英訳で行った。このようにしたのは、一貫性を保持するためであると同時に、この著作に盛られたすべてのものに直に接してもらいたいと読者に願っているからであるが、ここで翻訳について私の原則めいたことを説明しておきたい。私は、英語で書かれていないテキスト（ロシア語のものは除く）はすべてそれぞれの原語テキストにそって論考を行ってきた。しかし、可能な場合は既に刊行されている英訳版から引用した。その際に、英訳版を原語に当たっていちいちチェックした。英訳がない場合は、もしくはあっても私の意見では不適當と思われる場合は、自分で翻訳を行った（逐語訳した場合もある）。従って、とくに断っていないときは私の翻訳であると理解してほしい。私の翻訳で拙いものもあるかもしれないが、他の人の常軌を逸した翻訳を用いるよりは、自分がコントロールできるやり方で発想を原文から正確に表現する翻訳（たとえ素人くさくても）で少なくとも間に合わせたほうがよいと思って、そうすることにしたのである。むしろ、私の翻訳がとくに格調高いとは思っていない。にもかかわらず、読者の便宜をはかつて原語で短い一節をあちこちに挿入した。また、いかなる場合でも、私の翻訳した個所の原典を原語で示しておいた。

"The Tower" from *Collected Poems* by William Butler Yeats. Copyright 1928 by Macmillan Publishing Co., Inc.; copyright renewed © 1956 by Georgie Yeats. Reprinted by permission of Macmillan Publishing Co., Inc., Macmillan Company of Canada Ltd., Michael Butler Yeats, Anne Yeats, and Macmillan of London and Basingstoke.

"An Acre of Grass" from *Collected Poems* by William Butler Yeats. Copyright 1940 by Georgie Yeats; copyright renewed © 1968 by Bertha Georgie Yeats, Michael Butler Yeats, and Anne Yeats. Reprinted by permission of Macmillan Publishing Co., Inc., Macmillan Company of Canada Ltd., Michael Butler Yeats, Anne Yeats, and Macmillan of London and Basingstoke.

"The Convergence of the Twain" from *Collected Poems* by Thomas Hardy. Copyright 1925 by Macmillan Publishing Co., Inc. Reprinted by permission of Macmillan Publishing Co., Inc., Macmillan Company of Canada Ltd., and the Trustees of the Hardy Estate, and Macmillan of London and Basingstoke.

"Of Mere Being" from *Opus Posthumous* by Wallace Stevens, ed. with an introduction by Samuel French Morse. Copyright © 1957 by Elsie Stevens and Holly Stevens. Reprinted by permission of Alfred A. Knopf, Inc., a division of Random House, Inc.

Selected passages from *The Collected Works of Paul Valéry*, ed. by Jackson Mathews, Bollingen Series XLV, Vol. 8, *Leonardo, Poe, Mallarmé*, trans. by Malcolm Cawley and James R. Lawler. Copyright © 1972 by Princeton University Press. Reprinted by permission of Princeton University Press and Routledge and Kegan Paul Ltd.

Selected passages from *The Interpretation of Dreams* by Sigmund Freud, trans. and ed. by James Strachey. Reprinted by permission of Basic Books, Inc., Publishers.

"Sonnet 23" from *Sonnets to Orpheus* by Rainer Maria Rilke, trans. by M.D. Herter Norton. Copyright 1942 by W.W. Norton and Company, Inc.; copyright renewed © 1970 by M.D. Herter Norton. Reprinted by permission of W.W. Norton and Company, Inc. German edition, *Gesammelte Werke*, Band III: *Gedichte Die Sonnette an Orpheus II Teil XXIII*, p. 335 (Insel Verlag, Leipzig, 1930). Copyright © 1955 aus "Saemtliche Werke, Band I" Insel-Verlag, Frankfurt am Main. Reprinted by permission of Insel Verlag.

Selected passages from *The New Science of Giambattista Vico*. Revised trans. of the third edition (1744) by Thomas Goddard Bergin and Max Harold Fisch. Copyright © 1968 by Cornell University; copyright © 1961 by Thomas Goddard Bergin and Max Harold Fisch; copyright 1948 by Cornell University. Reprinted by permission of Cornell University Press.

Two lines from Hölderlin *Poems and Fragments*. Reprinted by permission of the publisher, University of Michigan Press.

Selected passages from *Doctor Faustus* by Thomas Mann, trans. by H.T. Lowe-Porter. Copyright 1948 by Alfred A. Knopf, Inc. Reprinted by permission of Alfred A. Knopf, Inc., a division of Random House, Inc.

Selected passages from *The Order of Things: An Archaeology of the Human Sciences* by Michel Foucault, trans. by Alan Sheridan-Smith. Copyright © 1970 by Random House, Inc. Reprinted by permission of Pantheon Books, Inc., a division of Random House, Inc.

Selected passages from *The Archaeology of Knowledge* by Michel Foucault, trans. by Alan Sheridan-Smith. Copyright © 1972 by Tavistock Publications Ltd. Reprinted by permission of Pantheon Books, Inc., a division of Random House, Inc.

Parts of this book have appeared in *Salmagundi*, *MLN*, *Aspects of Narrative*, ed. by J. Hillis Miller (New York: Columbia University Press, 1971), *Modern French Criticism*, ed. by John K. Simon (Chicago: University of Chicago Press, 1972), *Approaches to the Twentieth Century Novel*, ed. by John Unterecker (New York: Thomas Y. Crowell, 1965), and *Boundary 2*.